研究ノート

羽出浦の歴史と民俗(三)

安部　弥右衛門

第二章　人生と行事

1　人の一生

(1)　出産・年齢通過

帯祝い　初産の時だけ、トリアゲ婆さんを始め、近親の婦人を招いて、戌の日に帯祝いをする。腹帯は鯨尺で七尺五寸三分というが、たいてい一丈を媒酌人が贈る。二子以降は帯祝いをせず、最初に使った腹帯を蔵っておいて結ぶ。

安産祈願　昔は家族の誰かが、大分の高城山に安産祈願に参っていた。上棟式の際、餅投げのために、軒にかけた梯子を登る時に履いた草履を、産婦に履かせると産が軽いという。妊婦が箒を跨いだり、毎晩のように入浴すると胎児が太り過ぎて難産する。高く手を差し上げると流産する。便所の掃除をすれば美しい子供が生まれるという。

出産　奥の部屋で、布団の上に油紙やぼろ布を敷いて生む。へその緒はトリアゲ婆さんが、糸で固く縛って鋏で切った。乾かして紙に包み、名前を書いて蔵っておく。

木製のたらいで産湯を使うが、産湯に潮水を入れた。赤ん坊を洗う時に神々の名を唱える。小皿に入れて供えてある塩を少し、赤ん坊の口に入れるトリアゲ婆さんもいた。

後産　後産は壷に入れて、産室の床下に浅く埋めていたが、大正以後は、山の端れか藪の中ほどに埋めるようになった。後

産を埋めた上を何かが通れば、その物を恐れるようになるという。

授乳　乳の出が悪い時は、カンゾウを削って煎じ、綿の小さな球を浸して吸わせ、母乳の出のよくなるのを待った。母乳が不足すれば貰い乳をしたり、米の粉の糊に甘味を加えて与えた。糊では腹をこわしたり、栄養障害を起した。

産婦には青魚はいけないといって、脂気の少ない白味の魚を食べさせた。餅や味噌汁は乳の出がよくなる。サフランを煎じて飲ませると血が収まるという。

名付け　七夜に名付け祝いをする。親類縁者を招客する家もあれば、赤飯や神酒を神仏に供え、家内だけで祝う家もあった。昔は祖父母・父母・伯叔父母の名の、何字かを取って命名することもあった。

産婦の夫は七日間、網船に乗ったり網仕事をしてはならなかったが、配当は受ける。

明治時代には、入籍が何か月も遅れることが多く、他人に頼んだりして、実名と戸籍上と違うことも多かった。稀には性別をまちがえていたため、徴兵検査に女性が出頭を余儀なくされたこともあった。

夜泣きする時は、半紙に雄鶏を描いて荒神様の祠に貼ると効くという。

宮参り　男児は三一日、女児は三三日目に、宮参り着物を着せ、母親や近親の婦人が抱いて参る。拝殿に寝せて拝礼し、神殿を一周して抱き上げる。帰途、近親の家などに立ち寄ると、宮参り着物に糸で目印や折鶴をつけて祝ってくれる。

産婦が実家に赤ん坊を連れて初歩きするのは、二〇日以上、三〇日以上経ってからだという。

百日　百日目に食い初めを祝う。箸で飯粒などを挟んで食べさせる。たいていは舌先きで口外に突き出している。

初節供　初雛祝い（ハツビイナともいう）には、嫁の里が雛人形を贈ってくる。他の近親者も個々の人形を贈る。大正時代には五段雛以下で、品質はよいが案外廉価であった。江戸絵という人物画一〇枚くらいを、雛壇の周囲を張りめぐらしていた。近親者を招客する。

初幟りには、武者絵の立幟りと五色の吹き流しを立てていたが、大正時代の半ばから紙製の鯉幟りも上げるようになった。

また、大正時代からは内幟りを飾るようになった。立幟りが主であったが、武者人形・鎧・兜などを床の間に飾るようになった。幟りは家の方で買うが、近親者が贈ってくれることもある。四月下旬から節句当日まで立てる。親類縁者を招客する。

初誕生　誕生餅を搗く。鉄板かモロブタの上で餅を延べる。延べ餅の上を歩かせるが、独りでは立てない子もいた。切った延べ餅に若干のあん餅を添え、近親者や親交のある家に配る。

初ヘコ　男児が数えの九才になると、一重まわりの褌を締めさせた。白木綿であったが赤になった。子供は赤ヘコといって喜んでいた。猿又が流行するようになると自然消滅した。

七五三の宮参り

ワケーシ宿　数え年一五才になると若連中に入り、ワケーシ宿に泊るようになる。明治時代には男女混宿であったが、大正時代になると男女別になった。

農・山村と漁村では夜這いの意味が異なる。漁村ではワケーシ宿があって男女交際は自由であったから、両親と同居している娘の許に忍び込む必要はなかった。漁村での夜這いは、他地区の娘の許に忍ぶことを意味する。この噂が広まると、その地区の若いシが現場を押えようと努める。そして発見すれば、二人を公衆の面前で海に投げ込む、という制裁が不文律としてあった。このしきたりは、明治年間、若連中制度と共に存続した。

(2)　結　婚

殆んど村内婚で、結婚適齢期は、男子二三～二六才、女子一七～二三才くらいであった。しかし、家柄もよく財産もあり、

容姿は普通以上の娘が、中等以上の教育を受けた場合には縁付きが遅れていた。

本人同志が仲良くなっても、次のような理由で、双方の親や親類が同意せぬために、成立しないことが多かった。イ、迷信による。ロ、家柄の不釣り合い。ハ、主な近親の家がその娘を望む。ニ、相手に対する不満などである。

嫁貰い　親類筋から良い娘がいるという話があると、伝手を求めて内々聞き合わせる。両親が相談の上、よかろうということになれば、息子にその娘をカゲミに行かせる。息子も同意し、先方も結婚の意志があるなどを探った後、媒酌人を立て、吉日を選んで申し入れに行ってもらう。

一升入りの徳利に七合五勺ほど酒を入れ、徳利の上端を折った白紙で結ぶ。使いに持たせて先方に訪問を予告する。先方に娘を結婚させる意志がなければ酒を受取らない。夕方頃、媒酌人は必ず小丸提灯を携えて、男方の主な近親者を同行する。先方で四方山話の好機をみて、改まって縁談の申し入れをする。二～三回の訪問で、順調にまとまることもあるが、難航の末に不成立ということもあった。

まとまれば、媒酌人と娘方の家族、近くに住んでいる主な近親者を混えて、縁談成立の簡単な宴を開く。この時に七合五勺の酒を使う。思慮深い媒酌人は長座せずにお暇をする。長居をしていると他より故障が入り易いためである。

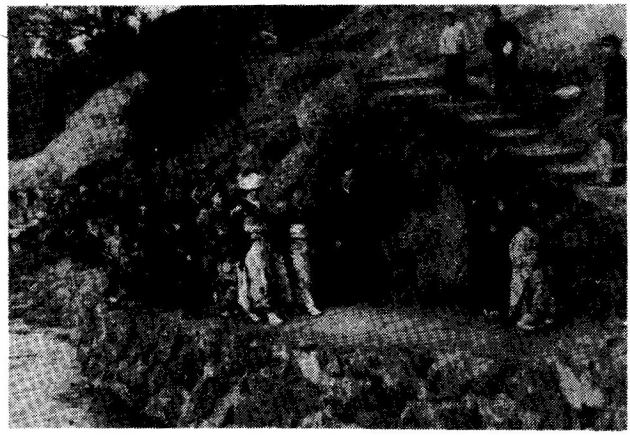
敷居越し　縁談は成立したが、何かの都合で、婚礼までの期間が長いと思われる場合には、双方の話し合いでシキイゴシをすることもあった。

また、祝言をせずに、近親者が付いて行くヒッコシということも、貧しい家の場合は稀れにあった。

嫁盗み　男の方の両親は同意しても、娘の両親が反対の時は嫁盗みをしていた。娘を男の家に連れて来て、その旨を娘の方に伝える。この使いが先方に捕まると話は難しくなる。使いの者は夜間戸外から、使いの口上を言って早く逃げねばならなかった。

娘を嫁がせたいが、近親の家に遠慮しなければならない場合には、双方が談合の上でこの方法を利用することもあった。

嫁御迎え　婿方より、媒酌人夫婦と主な親類の男女一〇名くらいが、嫁を迎えに行く。男は羽織・袴というが、袴なしの人が多かった。女は裾模様小袖である。昼間でも必ず小丸提灯を携える。嫁方では親類一同が集まって待っている。主客の挨拶が済めば宴席に着く。改めて双方の挨拶がある。三つ組の盃が回ってから酒宴となる。頃合いをみて、花嫁の列席を求める。嫁方は支度が整っていない、などの口実で酒を勧める。暫くしてまた嫁の列座を乞う。丸髷の花嫁と島田髷のヨメゴワキが一緒に出る。ヨメゴワキは花嫁の友人か親類で、花嫁よりやゝ年が若い娘である。一しきり盛んに盃が回った頃、嫁の出立ちを催促し、婿方一同は挨拶を述べて玄関から出る。



嫁入り　昭和20年代

嫁入り　花嫁は縁側から出る。嫁方は両親か名代の人を始め、一五～二〇名くらいが行く。その他の親類は後座に残って酒宴を続ける。

昭和の半ば頃まで、嫁入りの通路には、船・角材・柴束など積み上げて通れなくし、掌に鍋墨などを塗って待ち構え、行列の誰彼なく顔に墨を塗りつけて祝っていた。行列中の元気の良い人が障害物を取りのけて通る。たんす・長持を嫁入りに持参することは、大正時代から徐々に行われ出した。

祝言　婿の家に着くと、婿方の代表者が出迎えて挨拶し、式場に案内する。大正頃までは家が狭少であったから、襖・障子を取り外して一室にしていたので、三々九度の盃も披露宴会場も同じである。

上座に媒酌人夫婦、嫁方は花嫁・ヨメゴワキ・親類一同、婿方は婿方を除いた親類一同が座る。挨拶の後、三つ組の盃が回り、小盃から酒宴となる。暫くして、花嫁方から花婿列座の催促がされる。花婿が姿を現わすと、媒酌人夫婦が立ち、花婿・花嫁を上座にする。三々九度、ついで親子盃をする。明治初年には謡曲が

流行していて、高砂などの謡があったというが、明治〜大正期には、謡は勿論、三々九度の盃を正式に行うことは至って稀れであった。

酒宴の座がうちとけて賑やかになる頃、花嫁は着更えて酌をして回る。しかし、色直しを二〜三回もすることは、大家以外にはなかった。嫁方は適当な時に辞去する。

客が帰った後は、後座の料理を並べる。後座は婿の友人や親類の若いシだから、料理は簡単であるが大賑いとなる。

翌日は、家によっては村の有志を招待するが、喜びの客の応接と板敷払いで賑わう。

婿入り 祝言後の吉日を選んで、新夫婦・両親・媒酌人が酒肴を携え、嫁の里に行く。嫁の里では予め連絡を受けているので、本家・分家の主人などを招き、酒宴となる。

婚入りから間もなく、嫁の両親が婿の家を酒肴を持って訪れる。姑入りという。

年祝い 厄年は、男が二五・四一・六一才、女一九・三三才である。二五才男・一九才女は、鏡餅一重ねを氏神に供える。男の四一・六一才、女三三才の時は、ナラビの朔日（旧二月一日）に、一重ねの鏡餅・初穂料を持って参り、神官に厄除けの祈願をしてもらう。重箱・神酒を携え、神官とオミキアゲをする人もある。家によっては、吉日に近親者を招いて年祝いをする。

古稀（七〇才）・喜の字（七七才）・米寿（八八才）・白寿（九九才）の祝いは、近親者が内祝いをする。羽出浦には白寿の祝いをした人は未だいないという。年祝いの時には、同年の人は招待を遠慮し、招かれることがあっても出席しないものだ

夫婦盃の座

という。

(3) 葬　送

末期の水　いよいよ臨終となると、近親者は死者の周囲に集まり、白布に水を滲み込ませて唇をしめしてやる。家によっては、仏壇のシキビ（しきみ）やハイの木の葉を使うこともある。

枕直し　死者を仏壇の前に移し、北枕に寝せる。顔を白布で覆い、着物を逆さに死者にかけ、枕元に剃刀などの刃物を置く。周囲に屏風を立て、「仁寿仏」という掛図を下げる。共に福聚庵に保管してある。屏風の前に経机を置き、一本花・一本線香・椀飯・団子・果物・菓子・枕石・ろうそくなどを供える。椀飯には一本箸を突き立て、団子は洗わな米を石臼で摺った粉で作る。僧に枕勤めの経を上げてもらう。神棚に白紙、玄関に忌中と書いた白紙を貼る。

お悔み　部落の人々はお悔みを述べに行く。仏様を拝んだり、仏前に進んで香を捧げた後にお悔みを述べる人もあったが、お悔みだけを言う人が多い。喪家では主な人が応接する。友引には葬儀もお悔みも忌むしきたりであったので、喪家に行ったり、喪家の人に路上で出逢っても、友引である旨を断ってお悔みは述べない。ミッカビ（三日目）の場合も同様である。

通夜　部落の老婦人の代表格の人に頼むと、老婆達が日暮れ頃に来て深夜まで、仏前で念仏や御詠歌を上げて回向してくれる。茶菓・酒・飲食物を出してもてなす。

野道具作り　葬儀に協力してくれる無常講はない。親類や懇意にしている人が手伝ってくれる。棺・位牌・卒塔婆・シカ花などを作る。棺は立棺であったが、火葬をするようになって寝棺となった。杉の四分板を佐伯で買って大工に頼む。そうめん箱を買って、壊して棺にする家もあった。この時は巧者な人が俄大工となる。棺台・天蓋・龍頭・提灯枠は福聚庵に蔵ってあるので、紙を貼り替える。卍を書く角紙、四枚の幡、棺・天蓋につける燕などを作る。卒塔婆を七枚作っていたが、寺参りした時に四九日までの分を受けるようになった。

墓穴掘り　二名で掘る。柄を短くした鍬と土砂を入れる皿籠、酒一升とお菜を入れた重箱を持って行く。酒を手向けてから

掘る。火葬になってからは、骨壷だから深く掘らなくてもよい。累代墓の家は掘る必要がない。

湯灌　湯灌の時は畳を一枚上げる。近親者一～二名が片肌を脱ぎ、左ないした荒縄を左肩から右腋下にかける。今から湯灌しますと言って、枕元の畳を箒で三回叩き、静かに抱きかかえて、大たらいに座らせて支える。大たらいの中には予め水を入れ、次に湯を入れて微温湯にしてある。死者を洗うのは身近な婦人達である。湯灌の時に、死者に涙を落としかけると仏のためによくないというので、悲しみを懸命にこらえる。拭き終ってから頭を剃る。以前は丸坊主にしていたが、現在は月剃りといって、前頭部の中ほどを少しばかり剃っている。湯灌した水は床板をはずして床下に捨てていたが、海に流すようになった。湯灌が終れば、男なら褌、女はオコシをさせ、キョウカタビラを着せる。キョウカタビラは晒木綿の三尺着物で、ボンサン（糸止め）や返し針をせずに、年長の婦人達が縫う。白木綿で頬冠りをし、額に卍を書いた三角の角紙を巻き、手貫・脚絆・足袋を履かせる。首には文銭を六枚入れたサンヤ袋を掛ける。寛永通宝がなくなってからは、厚紙を丸く切って穴をあけていたが、葬儀屋が持って来るのは、一枚の紙に六この円を書いたものである。

納棺　立棺の時は立膝をした格好に座らせ、合掌して手首に珠数を掛けているように納めた。棺の中には団子を始め、死者が生前愛好していた品物を入れていたが、火葬になってからは焼けにくい物を入れず、身体の揺れを防ぐために巻藁などを軽く詰めている。蓋の釘止めは最も身近い人から打ち、最後は最も身近い人が止める。色紙を多く貼った棺の正面を前にして、仏壇の前に安置する。

出棺　葬儀の日を決めるのは、檀那寺の都合を聞く必要があった。檀那寺はたいてい佐伯にあったので、船を出して寺と相談して決めた。葬儀の日は「お寺迎え」の船で、僧と葬式に必要な諸道具を運び、終れば僧を送るので、三人漕ぎの船を二往復させるか、業者の船を雇った。僧が喪家に着くと茶を出す。分家で茶を出した後に喪家に案内する家もあった。和尚は仏壇を拝んでから、二枚の白木の位牌に戒名を書く。納所または院代が幡や卒塔婆を書く。柩に経を上げて焼香が終れば、出棺して葬儀場に向かう。

葬列　近親の老人が案内に立って、僧が葬列の先頭を行く。次に提灯・流れの幡・シカ花・造花・団子・一膳飯・打ち覆い（高膳に載せる）・位牌・鉦・遺族・棺・会葬者の順である。位牌は直系の近親者が持つ。棺は棺台に載せ、次男が前、長男が後、棺側には近親者がつく。棺台には、シカタという長さ六尺の晒木綿が結んであり、棺台の前後を持つ人が首に掛ける。式後は網のムラギンが、白い大団扇の代りにフリテヌグイとして使う。棺台を持つ人は藁草履を履き、式後は帰途で脱ぎ捨てる。この草履を捨って履くとあかぎれができないという。また、棺台には善の綱という一反の白木綿が結んである。親族の婦人が左右から善の綱を持つ。近親の婦人は忌中まげを結って棺の近く、遠縁の婦人は綿帽を冠って前の方につく。現在は綿帽子を止めて白紙を狭く畳んで髪につけている。妊婦は白紙を髪挿に挟んでいた。龍頭は近親の人が棺に差しかけて行き、野辺では棺の上に置く。

葬列

野辺送り　福聚庵の境内か、作網代の共同墓地にあった葬儀場で葬儀をしていた。土葬の棺を葬儀場まで運ぶのは大変難儀であった。

葬儀場の周囲には、寺から持って来た幕を張りめぐらし、和尚の机ときょくろくを置く。和尚には赤い大きな日傘を差しかける。先着の人々は持ち物を持ったまゝ、葬儀場の一角に立って棺の到着を待つ。善の綱を持った一団が場内に入るようになると、幡は一人がまとめて持ち、先頭になって場内に入り、善の綱や棺と共に左回りに三周してから、棺台を安置する。昔は敷米といって、玄米三斗入りの俵を何俵か棺台の下に敷き、寺に寄進する家が稀れにあった。棺の前に香華を始め供物を供え、龍・幡などは棺に差しかける。僧が読経を始める。焼香の経を読み始めると近親順に焼香する。葬儀が終れば会葬者は葬家に向かう。明治

葬儀場で左回りする輿

二〇年代に、敷米をした葬儀で、無紋の裃を着た二人の老人が路傍に跪座して、帰路につく和尚に低頭しているのを見た。

お斎　喪家に着くと、塩をもらって身を清め、手を洗って家に入る。仏壇を拝んで斎の座につく。方丈または院家が上席で、納所または院代や伴僧、ついで喪家の本家や親類が座る。古い本家に重きをおいていたが、昭和になってから村の有志を重視するようになった。お斎の時に寺参りの日程を決める。僧を佐伯まで船で送る。二番座になった人に使いを出して案内する。埋葬に行っていた人々も帰って二番座のお斎につく。

お斎が終ると、遺族が必ず二人連れ立って、会葬者の家を回礼する。遠方の家には会葬御礼の葉書を出す。

死ニヨワイ　現在は葬儀を行う部屋は、生花や造花で埋め尽くされたように飾り立て、葬儀屋に何十万円と払っている。しかし、昔は葬儀は簡素であったから、経費も少なかった。集まった香典で支払いをした後に、五円か一〇円の残りが出れば、老人は死ニヨワイができたといっていた。死んだ時の葬式費用とでもいう意味である。葬儀費を借りるということを恥だと考えていたので、働いてえた僅かの金や、子からもらった小遣銭がまとまると、死ニヨワイができたと安心して他人に洩らしていた。

埋葬　葬儀が終ると、近親者一〇名くらいで棺を墓地に運ぶ。墓穴に棺を入れ、棺の周囲に土をよく詰め、棺の上に団子・一膳飯・菓子・果物・シカ花・幡・卍などを置いて土を掛ける。土掛けは身近い順に一鍬ずつ掛け、後は元気な若者が掛ける。土饅頭に機織り用の古いオサを置いたり、古い漁網で蔽っていた。これは夜間に野狐が墓を発くのを防ぐためである。狐は網

やオサの目を数え終らねば、死体を発かないといっていた。尋常小学校一年生であった明治二六年、福聚庵の塀下の墓が発かれて穴の中に僅かなぼろ布が残っているのを見たことがある。生後間もない嬰児が葬られ、墓直しも済んでいなかった。

火葬　火葬場がなかったので、村端れの磯や浜辺で露天焼きにしていた。浜辺に一艘の大きな漁船を用意し、長さ二メートル径一〇センチ以上の松丸太二本、薪（五把以上）・木炭一俵・古畳二枚・石油五合以上を積む。鉦に送られて家を出る。棺を船に積んで白崎に向けて漕ぎ出す。磯辺の岩場に木炭を拡げて薪を置き、二本の松丸太を渡した上に寝棺を置く。棺の両側にも薪を積み、海水に浸した古畳を両側に立てる。最も身近い人が頭の方、次の人が足の方から火をつける。火勢が盛んになると、浜の隅で待機する。心得のある人が見回って、古畳に海水をかけて乾燥を防ぐ。焼き終れば、焼き場に水を撒いて熱気を去ってから、骨を拾う。最も身近い人が拾ってから他の者が拾う。各自木と竹の箸一本ずつを持ち、一人が挟み上げると、他の人が挟みうけて壷に入れる。骨を拾い終るまでこの動作を続ける。遺骨は持ち帰って仏壇に安置する。庵主さんが来て回向し、老婆達が念仏申しをする。

町営の火葬場ができてからは、一応家に帰り、火葬の終る頃を見計らって火葬場に行く。

墓地　明治三五年頃、一〇府県を限って、土葬墓地は人家より六〇間以上離れないと許可しないとされ、大分県もその制限県に指定された。羽出浦は小々谷と鰹岡見に新墓地を設けたが、新墓地は不便であるばかりでなく、葬る余地も無くなったので、火葬をして旧墓地の先祖墓に合葬するようになった。昭和になってから、コンクリート造りの墓地に、花崗岩の累代墓を作って納骨するようになった。現在は新墓地を使っている家は無くなった。

ミツカビ　亡くなってから三日目をミツカビという。僧と共に墓参りして回向していたが、現在は葬儀が三日以後になってる。

寺参り　葬儀の翌日、喪主など近親者一〇名くらいが、檀那寺に参る。葬儀と当日のお礼、敷米を持って行く。寺では喪家の家格とお包みを勘案して、昼の酒食を出す。現在は茶菓のもてなしである。

遠夜　初七日は庵のお坊さんが来て回向と墓参りをする。老婆達が宵から一〇時頃まで念仏申しをするので、茶菓・酒・夜食などを出す。初七日までは精進料理であったが、現在は葬儀当日のお斎にも魚料理を出す。二・三・四・六七日は親類が参るだけである。五七日は三五日ともいい、四九日の法事を併せ行う家もある。僧を迎えて仏前と墓前で回向する。夜は老婆達が来て、長念仏や御詠歌の供養がある。お礼が派手になって砂糖箱や饅頭などをおみやげに差し上げている。七七日は五七日と同じであるが、五七日に取り上げた家は七七日はしない。

「四九日の鐘の音を聞いて亡者の霊魂は家の棟を離れる」という。四九日までは墓地に毎晩火を灯す。昔は夕方にランプを持って行き、翌朝取りに行っていた。今は家から電線を引いて、朝夕に点滅している。四九日に墓地の日除けを取り壊す。四九日までに故人の遺品分けをする。

年回　お寺では年忌という。一、三、七、一三、一七、二五、三三、五〇年忌は、檀那寺から年の初めに通知が来る。一年忌はムカワレという。命日前に寺に行って回向してもらい、卒塔婆をいただいて帰る。命日に近親者を招いて法事をする家もあるが、法事をしない家でも念仏申しだけはする。念仏申しは五〇年忌を除いて年回毎にする。三年忌は三年のムカワレという。一年忌に同じであるが、寺で施餓鬼の法要とする家もある。一三・三三年忌には法事をする家が多い。五〇年忌の法事は、他の法事が同年内にある場合は繰り上げる。寺参りはするが、家での念仏申しは行わないことが多い。

念仏申しの御詠歌・和讃を次に記す。

高祖弘法大師御詠歌

有難や高野の奥の岩蔭に
　大師はいまだおわしますなる
高野山結ぶ庵に袖朽ちて
　苔の下にぞ有明の月

あじの子があじの古里立ち出でて
　また立ち帰るあじの古里

高野山御詠歌

高野山山にはあらで蓮葉(はちす)の
　華さかのぼる今日の嬉しさ

忘れても汲みやしつらん旅人の
　高野の奥の谷川の水
天(あめ)が下照らさぬくまもなかりけり
　高野の奥の法(のり)の灯

西国三十三所御本尊御詠歌

普陀落や岸打つ波は三熊野の
　那智の御山に響く瀧つ瀬
古里をはるばる此処に紀三井寺
　花の都も近くなるらん
父母の恵みも深き粉河寺
　仏の誓いたのもしの宮
御山路や桧原松原分け行けば
　まきのおでらに駒ぞ勇める
参るより頼みをかくる藤井寺
　花のうてなに紫の雲
岩を立て水をたたえて壺坂の
　庭のいさごも浄土なるらん
今朝見ればつゆ岡寺の庭の苔
　さながら瑠璃の光なりけり
幾度も参る心は初瀬寺
　山も誓いも深き谷川
春の陽は南円堂に輝きて
　三笠の山に晴るる薄雲
夜もすがら月をみむろど分け行けば
　宇治の川瀬に立つは白波
逆縁も洩らさず救うぐゎんなれば
　じゅんてい堂は頼もしきかな
水上はいずくなるらんいわま寺
　岸打つ波は松風の音
後の世を願う心は軽くとも
　仏の誓い重き石山
出でいるや波間の月を三井寺の
　鐘の響に明くる湖
昔より立つとも知らぬ今熊野
　仏の誓い新なりけり
松風の音羽の瀧の清水を
　結ぶ心は涼しかるらん

遅くとも五つの罪はよもあらじ
　六波羅堂へ参る身なれば
わが思う心の中は六つのかど
　ただまろかれと祈るなりけり
花を見て今は望みもこうどうの
　庭の千草も盛りなりけり
野を過ぎて山路に向かう両の空
　よし峯よりも晴るる夕立
かかる代に生まれ逢う身のあなうやと
　思わで頼めとこえひとこえ
おしなべて高き賤しき総持寺の
　仏の誓い頼まぬはなし
重くとも罪には法のかちお寺
　仏を頼む身こそ安けれ
野をも過ぎ里をも行きて中山の
　寺へ参るは後の世のため
哀れみや遍きかどのしなじなに
　なにおか波のここに清水
春は花夏は橘秋は菊

　いつも妙なる法の花山
遥々と登れば書写の山嵐
　松の響もみ法なるらん
波の音松の響もなりあいの
　風吹き渡す天の橋立
そのかみは幾代経ぬらんたよりをば
　千歳もここに松のおの寺
月も日も波間に浮かぶ竹生島
　船に宝を積むここちして
八千歳や柳に長きいのち寺
　運ぶ歩みのかざしなるらん
あなこうと導き給え観音寺
　とおきくにより運ぶ歩みを
万代の願いをここに納め置く
　水は苔より出ずるたにぐみ
世を照らす仏の誓いありければ
　まだ灯は消えずありけり
今までは親と頼みしおいづるを
　脱ぎて納むるみののたにぐみ

弘法大師和讃

帰命頂礼遍照尊、宝亀五年の水無月に
玉も寄るてふ讃岐がた、屏風が浦に誕生し
御年七つのその時に、衆生の為に身を捨てゝ
五つの岳に立つ雲の、立つる誓いぞ頼もしき
遂にすなわち延暦の、末の月なる五月より
藤原氏のかのうらと、唐船に乗りおえて
印を残す一本の、松の光を世に広く
弘め給える宗旨をば、真言宗とぞ名付けたる
真言宗旨の安心は、上魂下魂の隔てなく
（下略）

賽の河原地蔵和讃

これは此の世の事ならず、死出の山路の裾野なる、賽の河原の物語、聞くにつけても哀れなり。二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬ嬰児が、賽の河原に集まりて、父上恋いし母恋いし、恋いし恋いしと泣く声は、此の世の声とは声変り、悲しさ骨をとおすなり。かの嬰児の所作として、河原の石を取り集め、これに回向の塔を積む。一重積んでは父の為、二重積んでは母の為、三重積んでは古里の、兄弟わが身と回向して、昼は独りで遊べども、陽も入り合いのその頃は、地獄の鬼が現われて、やれ汝等は何をする、娑婆に残りし父母は、追善だ善の務めなく、唯明け暮れの歎きには、むごや悲しや不びんやと、親の歎きは汝等が、苦げんを受くる種となる、われ等を恨むることなかれ、黒金棒を取り伸べて、積みたる塔を押し崩す。その時のうけの地蔵尊、ゆるぎ出でさせ給いつゝ、汝等命短かくて、冥土の旅に来たるなり。娑婆と冥土は程遠し、われを冥土の父母と、思うて明け暮れ頼めよと、幼き者を御衣の、裳裾の中に掻き入れて、哀れみ給うぞ有難き、未だ歩まぬ嬰児を、錫杖の柄に取り付かせ、忍辱慈悲の御膚に、懐き抱えて撫でさすり、哀れみ給うぞ有難き。南無阿弥陀仏。

円光寺大師黒谷和讃

帰命頂礼黒谷の、円光寺大師の教えには、人間僅か五〇年、花に喩えば朝顔の、露よりもろき身をもちて、なぜに後生を願わぬぞ。たとえ浮き世に永らえて、楽しむ心に任すとも、老いも若きも嫁も子も、遅れ先立つ世の習、花も紅葉も一盛り、十や十五の蕾花、十九や二十の花盛り、所帯盛りの人々も、今宵枕を傾けて、すぐに頓死をするもあり、朝なに笑いし幼な子も、暮れには煙となるもあり、哀れ果敢なきわれ等かな。娑婆は日に日に遠ざかり、死するは年々近付きて、今日は他人の葬礼で、明日はわが身の葬礼し、これを思えば皆人に、親子・兄弟・夫婦とも、先立つ人の追善し、念仏唱えて信ずべし、あら有難や阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

七つ子和讃

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀

帰命頂礼七つ子和讃、父は奥州出羽の国、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀（以下〳〵は南無阿弥陀仏を三唱）、母は九州豊前なる、七つ子播磨のしょしゃ育ち、〳〵、父と離れて三年の、母に離れて今日七日、〳〵、七日七夜を泣き明かす、岩に生えたる若松は、〳〵、岩を頼りに育とうが、水に生えたる浮き草は、〳〵、水を頼りに育とうが、七つといえども幼な児よ、〳〵、幼な児どうして育とうか、あまりわが身の切無さに、〳〵、六十六部を思い立ち、三年六月に成就して、〳〵わが故郷に帰り来て、父の御墓に参りなば、〳〵、父の御墓は山となり、母の御墓は藪となる。〳〵、郷里兄弟あるなれば、これほど山にはすまいもの、〳〵、七月七日のことなれば、腰には鎌をしのぎさし、〳〵、去年の草は鎌で刈り、今年の草は手でむしる。〳〵、突いたる杖を柱とし、冠りし笠を屋根として、〳〵、高い所に香を立て、低い所に華を立て、〳〵、手には数珠かけ目に涙、鉦鉆の鐘をはりたて〻、〳〵、暫し間は回向する。南無阿弥陀仏と諸共に、〳〵、七つ子和讃も終りなり。

2　年中行事

(1)　正月の準備

煤払い　一三日を煤払いと定めていた。家の中の荷物・調度・食器類・建具・畳まで、全部戸外に運び出して塵を払う。竹や柴で作った長柄の箒で、天井裏・壁・座板などの煤や塵を掃き清め、柱・座板などに雑布をかけた。その年に死者のあった家は煤払いをしてはいけなかった。煤払いに使った竹や柴は、トンドを立てる場所に捨てる。子供達が集めてトンドの焚き草にする。

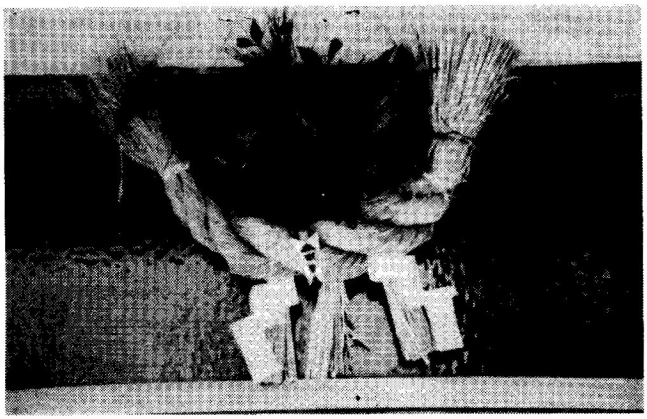
米搗きお客　昭和一五年頃まで、旧一二月に入ると、各家とも正月用の米の買い入れをしていた。玄米で三〜四斗入りの糯米一俵・粳米一俵宛を買っていた。自家で手搗きで精白するので、二〇日頃、親類や懇意な若者を何人か雇い、朝から晩まで米搗きをし、晩には酒食を供して米搗き客をしていた。

餅搗き　二五日頃糯米洗いをするが、多くの家が共同井戸を利用するので、水量の少ない年は大変であった。特に敷場部落はひどく、船に水桶を積んで、地下・作網代両部落に水貰いに来ることもあった。

二六〜二八日頃が餅搗きである。お鏡・小餅・餡餅を作る。鏡餅は一尺三寸以下四寸くらいのものを二〇個以上作る。二〜三個を一重ねにして神仏に供える。鏡餅のような超大型のテヌクメを作る。家族と搗いた人に一個ずつ配る。一回分の食料であるがたいていの人は食べ残す。小餅は焼き餅と雑煮餅用である。子供達は山から切って来た小竹の枝に、餅の小片をべったりつけて花餅を作っていた。餅は座敷に新しい莚を敷いて乾していたが、大正時代以後、鏡餅・餡餅はモロブタに乾して積み重ね、小餅は茅ごもに乾し、簀台に載せて重ねて乾すようになった。

迎え物　二八日頃、山に迎え物に行く。注連飾りに必要なツルノハは、羽出浦の山にはなかったので、中越浦の背後の山まで取りに行った。昭和二〇年頃までは正月準備は大変であった。

大晦日　朝はどの家でも福入り雑炊を炊く。昼食にはテヌクメを焼いて食べる。



注連飾り

潮時に関係なく年飾りをする。玄関・床の間・仏壇・神棚などに、ツルの葉・口紙・橙をつけた注連縄か注連飾り、窓・縁などの出入口、や臼・水甕・金庫・土蔵・便所まで、橙をつけない注連飾りをつける。家によっては玄関先に一対の門松を立てる。床の間の鏡餅は、ツルの葉の上に三個重ねる。上餅と中餅、中餅と下餅の間に、三こずつの小餅を入れる。神仏には一重ねずつの鏡餅を供える。

夕方、神仏に酒と御飯を供え、夕食を早く食べる。年飯を食べると年を取ったという。

就寝前に、箱提灯を提げ白扇を持って、家の門口で「御免下さい」と言い、家の中から応答があると、「静かな年の暮れでございます」と、申し述べて帰っていったという。

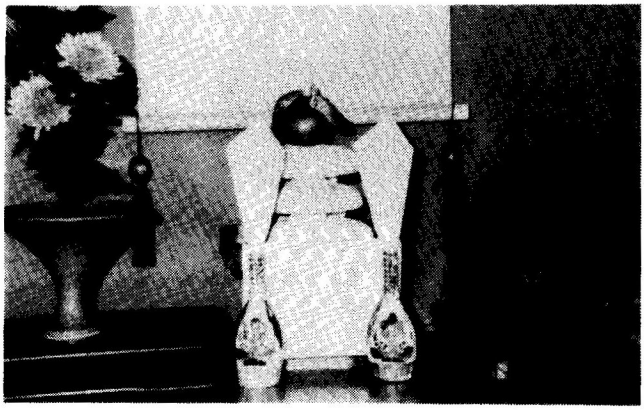
宮に参って年籠りをする。青少年は、羽出から佐伯まで船、佐伯から徒歩で尺間山に登り、尺間神社で年籠りをしていた。

(2) 正月

元日 年籠りから午前三～四時頃帰る。主人は顔を洗う。神酒スズに酒を入れて口紙を差し、水桶・釣瓶・六尺棒を持ち、提灯を提げた子供を連れて井戸に行く。膝まずいて、拍手・礼拝し、水神様に神酒を供える。子桶を引き寄せ、釣瓶の縄を解いて井戸に入れ、小声で「福を釣る」と唱えて一杯目、「徳を釣る」で二杯目、「幸を釣る」で三杯目、「万の宝、我れぞ汲み取る」と唱えて、四杯目を汲む。この朝は人と言葉をかわすと福が逃げるという。カマドに火を起して湯を沸かす。神棚に灯明を上げる。柄杓を持って浜辺に行って海水を汲み、天満宮に参る。

家族が起きてくると、今年の明き方を教える。年の初めには、顔を洗う、小便をする、歯固め餅を食べるにも、初回は必ず明き方に向かってすることになっていた。

火鉢に炭をついで歯固め餅を焼く。数の子や香の物をお菜にする。主婦は雑煮餅を炊く。主人は生餅を短冊型に小さく切り、折敷に入れて雑煮の汁をかけ、神棚に供える。朝食は雑煮餅である。昭和になってから、御飯も食べるようになった。屠蘇は殆んど飲まないが、昼食のセチの時に清酒を飲む。



鏡餅

午前九時頃から、家長が羽織姿で回礼する。まず、天満社と福聚庵に参り、部落役員・近親・親交のある家などに行き、新年の祝辞を述べて親交の御礼をいう。主人は丁重に答えて盃を出す。戦後、公民館で年賀交換会にしたが、最近は出席しない人が増えている。

二日　明治～大正の頃、羽出浦には五帖の小引網があった。東三か所、地下・作網代に各一か所の、網毎の波止場があり、丈夫な板を敷いた桟橋をつけて、網船の定繋場としていた。正月には、網船は舳にサガリを垂れ、艫には立幟り二本、国旗二本宛の旗印を立てる。小鯵網船なども数本宛の旗を立てた。

二日は網船の乗り初めである。夜の明けるかなり前に、網親方・ムラギン。引子が、定繋場につないである網船に乗る。網親方は真網船のマソウ（網槙）のトモベラ、一番ムラギンは真網船のマソウの舳ベラのイワオキ、二番以下のムラギンは逆網船のカサギ、引子は受持ちの櫓の位置につく。

網親方が船霊様の前に鏡餅と神酒を供えて拝礼する。引子が櫓を立て揃えると、舳マワリの若者が錨綱を解き放す。一番ムラギンが「艫によう御座るかー」と言い、

艫の引子が大声で「おーい」と答える。一番ムラギンが「トリカジー」と言う。艫の引子が「おーい」と答え、トモロオシが船の向きをトリカジに変える。一番ムラギンが「オモカジー」と言う。艫の引子が「おーい」と答え、トモロオシが船の向きをオモカジに変える。一番ムラギンが「今の舵より揃うたー」というのを合図に、引子が船板を激しく踏み鳴らす。この時に船はその年の明き方に向けている。舳側の引子が「やーんれ、やーんれ、やーんれ」と三回唱える。次は艫側の引子が同じく三回唱和する。交互に三度宛三唱をする。「ホウジャー、ホウジャー、ホウジャー」と、櫓声勇ましく、もやったまま二艘の網船は明き方に向けて漕ぎ出す。相当沖合いに出た時に、トモロオシが方向を変え、押し込みという勇壮な気品のある、歌とも掛声ともつかない櫓声を入れ、船は定繋場に帰る。船に立てていた松飾りを抜いて海に捨て、乗り初めは終る。

各自は自分の船を乗り初めしてから朝食を摂る。午前八時頃、ムラギン以下引子全員は網親方の家に集まる。乗り初めの祝いを述べて座に着く。雑煮餅と酒をいただく。酔いがまわると、サンヤレの祝いめでたな若松様を皮切りに、歌や踊りが出て大賑いである。丁銀という、長方形の厚い大きな餅を二箇宛貰って帰る。

網に関係のない一般の船持ちの家では、主人が、神酒・鏡餅・寛永通宝一二枚（閏年は一三枚）を盆に載せ、船霊様に供えて拝礼し、船の松飾りを捨てて帰る。夜が明けると、子供達は船持ちの家にノリゾメを貰いに行く。快よく一～五文、時には一〇文を与えるが、用意していた小銭が無くなると、「もう無いぞ」と断わられていた。

仕事のテハジメもする。手繰網引き・麦の中耕などを何時間かする。テハジメには、作の神様の鏡餅一重ねをいただけるので、子供達は楽しみにしていた。子供達は「書き初め」をする。机には一人に一重ね宛の「机の鏡」を供えていた。

三日　セチ日だから、朝は雑煮餅、昼はセチ、晩は米飯である。羽出浦でのセチ日には、朝が雑煮餅、昼は米飯である。なお、雑煮というのは野菜を柔くなるまで煮込んだもので、餅は入れない。餅を入れた場合には雑煮餅という。

この日は不成就日といって、旅立ちや新しい仕事・相談事などは差し控えていた。不成就日は月によって始めの日が違う。三・二・一・四・五・六といって、正月は三日、二月二日、三月一日、四月四日、五月五日、六月六日、七月三日、八月二日

九月一日、一〇月四日、一一月五日、一二月六日に始まり、八日目毎にくる。

四日　疫神（やくじん）の日である。疫神とは疫病神の意である。役の行者を信仰している行者講の家では、精進雑煮を炊いていた。

五日　ゴカンニチといってセチ日である。朝は雑煮餅、昼はセチ、晩は米飯におつゆくらいである。六曜が大安日であるので祝い事が多い日である。

羽出浦と中越浦に、昭和二〇年頃まで、各々小引網五帖と小鯵網三～四帖の網親方があり、正月五日と盆の一五日に、番くじを引いていた。宇土崎から白崎までの各網代を使う番を定め、漁業に関する協議の後に祝宴を開いていた。

五日頃から、あちこちの若者宿で、ワカドリ祝いという懇親会が開かれる。同宿者同志でしていたが、昭和になってからは、二つ以上の宿が合同してすることもあり、三味線・太鼓で大騒ぎをしていた。

六日　六日年といい、セチ日である。

六日頃から、小部落毎にトンド竹買いが始まる。羽出浦にはトンド竹になるような大きな竹がないので、若連中一〇名くらいが、他部落の若連中に気付かれないよう、夜半に密かに大きな漁船で出掛ける。吹浦か上堅田や戸穴まで行く。夜半に竹山に入り、尺三寸一本・尺一寸・四寸六本を買い、大急ぎで船に積んで帰る。部落の人々は、浜辺や屋敷の端に駈け出して見物する。船は全速力で、部落の前の海面で円を描いてから、海岸に着ける。竹を陸に揚げ、船を掃除してから若者宿に帰る。娘達が風呂を借りて沸かしているので入浴する。トンド竹買いが出たと聞くと、娘達は各戸を回って餅を集め、雑煮餅を炊く。風呂から上がって、酒・肴・雑煮餅を食べる。竹・紙・糊・酒などの費用を計算して、各戸から必要な額を集める。

七日　厄神様の日という。家族が起きる前に、カマドで鯖・鰯・鰺などの干物を焼いてふすべ、厄病神を追い出していた。大根・里芋・白菜・にんじん・ねぎなど、七種類の野菜を入れた米の雑炊を炊く。七草雑炊は精進汁だったと思う。

一〇日　十日戎といってセチ日である。網親方は引子を集めて戎祭りの酒宴をする。梶寄・大島では、申し合わせて出漁を止め、船の手入れや清掃を済ましてから、戎祭りの祝宴を開く。各戸は注連飾りをはずし、神棚の鏡餅を下げる。

一一日　「鏡開き」や「帳祝い」という。三方の上に帳面を載せて床の間に置き、ぜんざいを供える。神棚に供えた鏡餅一個を小さく割ってぜんざいを作り、朝食に食べるが、たくさん作るので晩まで残っている。

一三日　トンドを若連中が立てる。大倉・作網代・西野浦各一本、地下は二本であるが、地下の一本は屋敷内であるので飾りトンドといって、火をつけない。

共有林で長さ一丈くらいの丈夫な杭を一本伐って来る。定位置に杭穴を掘って立て、砂を入れた俵を寄せかけて杭を安定する。竹を組み合わせて山形に結び、三本の扇子を竹に挟む。大・中・小の短冊を上・中・下に配して結ぶ。トンド竹に数本の太縄を結び、竹の根元を杭の位置に移し、太縄を張って竹を起し、杭にトンド竹を縛りつける。太縄は杭や岩などに結んでトンド竹を垂直に安定する。

トンド立ての見物に来ている子供に、若連中が短冊を何枚かずつ分けて与える。子供達は切って来た竹に短冊を結んで家の前に立てて喜ぶ。

一四日　十四日年といってセチ日である。朝は雑煮餅、昼はセチ料理である。吉辰日とされていて、嫁話や結婚式などが始まる。出稼ぎが多いので、出稼ぎ者が帰省している師走から正月にかけてが、縁談は最も多かった。

一五日　午前二時過ぎ頃、「トンドを囃してくれーヨッ」と、浜辺近くで呼び立てる。「ソレ、トンド囃しだ」と子供達を起し、神棚の鏡餅を一箇持って浜に出る。一〇人くらい人が集まれば、一升徳利から茶碗に注いで、トンドの神酒をいただく。張り綱を結んである位置につく。一人が棒杭に結んであるトンド竹の根元の縄を解き、焚き草に火をつける。張り綱を解いて手に持ち、口々に声を揃えて「トンド、トンド、ギリギリギッチョウ、ギリギリギッチョウ、ギリギリ持ちやー、かーまんかー、かーもーこたー、かーもうがー、変事が起るけー、ヤーレかーやせー、かーやせヨー」と、三回唱えて倒すことになっているが、一回も唱え終らないうちに倒そうとする。トンドは明き方に向けて倒すことになっている。

トンド竹が倒れると、先きを争って扇子・大短冊を取り、子供に持ち帰る。トンドが倒れた時には、火も燃えさかっている

ので、鏡餅を焼く。餅は持ち帰って、庖丁で小さく切って餅粥を炊く。粳米に餅とささげ豆か小豆を入れる。餅粥に茶をかけて食べると、頭が禿げるという。

朝食後に、若連中が竹を鋸で切って各戸に分配する。網元には団扇竹、一般家庭には柄杓または箸用など、竹買いの時の寄附の額に応じて分ける。トンドは昭和四〇年代に中絶した。

一六日　斎の日、または「えんまさんの日」という。午前三時頃から、老婆達が福聚庵に参り、朝まで念唱を唱える。若者達は米水津村小浦の粟嶋神社や、浦代の饗福寺の裏山のお大師様などに参っていた。

この日は「藪入り」で、佐伯に丁稚や女中として奉公に出ていた者は、年季が明けて帰って来る。

一九日　羽出浦中の老婆が福聚庵に参り、南無阿弥陀仏を唱えながら、顔曳様の百万遍の大珠数を繰る。終ってから、小部落毎に各戸を回って、大きな珠数を繰りながら念仏を唱えて祈念する。珠数は六畳敷き一杯の大きさである。顔曳さんの念仏は、全戸を終るまで数日かかる。東・地下・作網代には各二組あったが、作網代は一組だけになっている。西野浦は僅か八軒であるが一組ある。敷場にはない。老婆達は小部落毎に、若干の金を出し合って、会食や茶会などを楽しむ。

日向泊は正・五・九月の三回しているが、羽出浦では正月一回だけである。しかし、観音様の前で行事をした後に、各戸を回って祈祷する外、火伏せ地蔵で火災予防祈願、延命地蔵では病疫予防祈願の百万遍をしている。

二〇日　朝食は雑煮餅で、昼食には塩魚を食べる。

羽出部落の初寄の定日である。各戸より一名ずつ出席し、予算・決算案、年間行事の審議、役員選挙、協議や伝達などがある。念仏申しの老婆達が、賽銭を持って福聚庵に参り、回向念仏をする。毎月二〇日の行事である。

山神さんの祭り日だから、山に行って味噌汁の匂いを嗅ぐといって、山に行かなかった。山稼ぎをする人々は、小倉の高橋家の下に祀る山神の祠の前でオミキアゲをする。山神は自然石を神体としている。

二一日　お大師講の例会日である。小部落毎に輪番で座元を務め、般若心経などを上げ、持ちよりの会費でお茶を飲む。大

正時代に始まり、戦後中絶した。

二四日　作網代の老婆達は、毎月二四日、地蔵さんの前に莚を敷き、お賽銭を上げて念仏回向をする。子供達に菓子などの接待をする。

二五日　各戸から一名ずつ出て初籠りをする。堂守が祈祷した後、部落総代が決定事項を伝達する。各自は持参した銚子・盃、重箱に入れた肴を出して酒宴となる。酒は部落が出す。

(3)　春から夏

二月一日　「並びの朔日」という。厄年に当たる人はお供え餅を、神棚や天神様に供え、親類、縁者の主な人を招客して「年祝い」をする。同姓で同年生まれの人は遠慮する。招客しない家では、家族全員が酒肴を持って神社に参り、堂守さんにお祓いをしてもらって、神社で祝盃をあげる。

八日　オアラタメといい、夕食にすし御飯を炊いて祝う。旧藩時代の宗門改めの名残りである。

二〇日　老婆達が福聚庵に参り、回向念仏をすることは正月に同じ。

二一日　お大師講で、夕方から座元の家に集まり、読経をすることは正月に同じ。

二四日　作網代の老婆達が、地蔵さんに参って回向念仏することは正月に同じ。

三月三日　雛節句　娘のある家は座敷に雛壇を設け、内裏雛を始め数々の人形を飾る。昔は江戸絵などをはりめぐらした。「初雛」は人の一生参照。

昭和の初め頃までは、娘達は御馳走を重箱に入れて、ヨソイ谷の磯に行って飯事遊びを楽しんだ。男児は村端れの畑に寄り集まって凧揚げをして遊んだ。

二一日　昭和の初め頃までは、青少年男女や中年婦人達は、小浦の粟島神社や浦代の養福寺の裏山の大師様に参っていた。お大師様を祀ってある所では、赤飯のおむすびやお菓子などをお接待した。

真言宗の門族は先祖祭りをする。

地蔵流し　老婆達が、好天で風波もない日に、お地蔵さん流しをする。地蔵像を彫った判を順繰りに各戸を回す。家々では、判に墨汁や墨を塗って、二寸×三寸の短冊型に切った白紙に地蔵像を刷る。判が世話人の老婆の許に戻ると、各戸で刷った地蔵の絵姿を集めて保管しておく。日を選んで、地下と作網代から一そうずつ仕立てた大きな手押し漁船に、一五～二〇人くらい乗り組む。船も漕ぐ人も信心深い漁師の奉仕である。鉦を鳴らして念仏を唱えながら、戸井崎鼻から白崎までの、羽出浦の前面の海を巡る。その間、処々で地蔵の絵姿を海に流す。時には白崎山の上に祀ってある。地蔵様に参ったこともある。近年は大型の手押し漁船がなくなり、漁業が忙しいために雇い入れができず、昭和五二年は陸行して地蔵流しをしなければならなかった。

四月八日　お釈迦様の日であるから、老婆達は福聚庵に参り、お賽銭を上げてお念仏を申し、甘茶をうける。大きなタライにお釈迦様銅像を立て、タライの甘茶を人々に振る舞う。子供はこの甘茶で墨を摺って書くと、字が上手になるといって持ち帰る。

五月五日　萱・菖蒲・蓬を小さく束ね、家の軒端にさす。ヨシや萱で包んだ粽や餅を作る。粽は二～三本のヨシをまとめ、その葉で米粉団子を包み、藁で巻く。一〇個を一束にして、神棚に供えたり、嫁の里にも贈る。初めての男児は初幟りを祝う。

クラアゲ　四月下旬か五月上旬頃、芋植えが済んで、芋畑の土寄せが終ると、クラアゲを祝う。家族だけで麦飯とケンチャン汁だけであるが、子供達は「お客」といって喜んだ。

土寄せが終った頃、ムラの周辺の峰にある猪垣の修理をする。作業の前日、「明日〇の猪垣の修繕をするから、各家から一人ずつ道具を持って、〇時に〇〇に集まれ」と、部落総代から触れが回った。主として濠の修繕をしていたが、昭和四〇年頃からしなくなった。

六月五日　天満宮の夏祭り　前日のヨゾの日にどの家も餅を作り、夕食にはすしを作る。餅は粉餅であったが第二次大戦頃から作らなくなった。甘酒は四月頃から仕込んである。

網船はべんがら色も鮮かに彩色して、ニョウシにサガリというしゅろ縄で作った大束を垂らし、尾上の爺婆の人形に風車を付けたものを、ニョウシの先端に結びつけ、艫の笠木には網名と蛭子像を描いた立幟りと、日の丸の旗とを二本ずつ立てて飾っていた。

神官は弥生町切畑の橋迫さんであったので、数名の社掌などと共に迎えの船で来て、頭元の家に泊まり、晩は神社で夜神楽を上げていた。現在は旅館に泊まっている。

祭りの当日、神官は神社で祝詞を奏してから、網船に乗って船霊様に祝詞を上げて豊漁を祈願し、全船の拝礼が終ってから、仕立てた船で帰る。

六月一二日　福聚庵の秘仏開帳、一二日から一八日まで、秘仏観世音菩薩の御開帳である。老婆達は数日前から煎餅作りに忙しい。庵主さんは、お供え物・フジ文・卒塔婆・一〇年回向・先祖代々供養など、目の回るような忙しさであるが、年一回のかき入れ時であるので、他の寺庵の僧に何日間かの応援を頼む。以前は本寺の潮谷寺から応援に来ていたが、近頃は人手不足で不可能なようである。一二日は昼頃に開帳する。一五日は中回向といい、開帳中で最も重要な日である。一八日は昼過ぎに閉帳し、午後は慰労会があり余興で大変に賑わう。開・閉帳の時は部落総代が立ち会う。大正頃までは、夜になると男達も参詣していたが、昭和になってからは少なくなった。

二〇日　老婆達が例月通り、庵に参って回向念仏をする。

二四日　作網代の老婆達が地蔵様に参り、例月通りお勤めをし、お接待をする。

オンボラ（大祓）　佐賀関の速吸日女神社と、佐伯の住吉神社が神輿を洗うので、この日は河童が危害を加えないという。海岸に湯桶を持ち出して遊泳し、青少年は遠く沖合いまで遠泳を試みるものもあった。

(4)　盆

七月七日　各戸から一人宛出て、共同井戸の井戸さらえをする。四斗桶の胴に大縄を結び、井戸の両側の二人が汲み上げる。

井戸に一人が入って桶に水を入れる。現在は簡易水道が設けられたので、井戸さらえはしなくなった。

七日盆ともいって、墓掃除をする。新精霊の家では、この頃から縁側などに親類から贈られた盆燈籠を釣り始め、経済力のある家では精霊棚を縁側に設けた。この頃からシキミの柴売りが木立方面から来て浜は柴売りの市場になる。

七夕の短冊を船で矢石まで買いに行く。

一〇日　午前三時頃から、老婆達が庵で念仏を上げ、朝までお籠りをする。帰途、大地下の安部庄一氏方に立ち寄り、同家の子安観音を拝む。

一一日　網毎にムラギン・引子が、連日浜に出て網をとき、水洗いして染め、乾燥して網に仕立て直し、操業の準備をこの日に終る。網元は引子全員を招いて「網上げ」を祝う。四貫八〇〇匁入りのそうめん数箱分を、煎り子製造の大きな平釜で煮上げ、四斗樽に入れた水で冷やし、直径一メートルもある浅い丹波ジョウケで水を切り、大皿に盛って食卓に置く。酒は四斗樽を据え、何本かの一升徳利で燗をする。三〇人～四〇人の大宴会である。

一三日　仏壇の掃除や飾り付けは七日から始めるが、終るのは一三日である。仏壇の上段から下段へ金襴を垂らす。上段には仏様、中段の累代の位牌の前に茶器・仏器・菓子・果物、下段に一般の供え物をおく。下段には、平常から花器・香炉・燭台・ろうそく入れなどが置いてあって狭いので、新盆の家では仏壇の前に小机を置き、霊前・果物・菓子などを供える。仏壇の前には、置灯籠や釣り灯籠を一対以上供える。長さ一メートル余の竹を仏壇のけたに副って釣り下げ、赤・青・黄など着色した灯籠菓子・ほうずきなどを下げる。

明治時代には、旧庄屋など数軒で施餓鬼棚を設けていた。

戦前は、盆・正月の二回が決算期になっており、商店は掛け売りであったので、貸借金の返済・入金・延期要請などに奔走する人、売掛金の回収に回る人、あるいは中元贈答や食料品の買い入れ、また家の内外の掃除・片付けなどに、一家中が忙しく働いていた。

晩飯にはそうめんを食べ、縁側の釣灯籠に火を入れる。精霊様が夜半に縁から帰ってくるからである。

一四日　朝食から精進に入るが、両親が健在であれば、一五日の昼までは魚を食べてもよいという。僧は午前三時頃から、矢石より敷場の方へと、各戸を読経して回る。夕方に墓参りをする。明治〜大正の頃は、地下の広場で盆踊りがあったが、昭和になってからは中越と敷場であり、踊り明かした。

一五日　若連中・消防組は、午後から踊り場を設営し、費用の寄付を集めて回る。日没後に墓参りをする。地下の浜に丸太で音頭棚を組む。一階は一間に二間、二階は一間に一間半くらいで、共に板を敷く。一階には音頭取りと太鼓、二階は精霊棚で、位牌を安置して僧が回向・読経をする。音頭棚の周辺は幕・大幟り・灯籠・色電球などで飾る。

一五日には、正月五日と同じように、一六日以後の網の番くじを決める。

一六日　精霊送り　精霊船や箱に、仏様の供え物・菓子・果物・団子などを入れ、ろうそく・線香を立てて、海岸から沖に向かって流す。精霊送りは未明である。

二〇日　盆の総寄りで、部落全戸が集まる定日であった。

二四日　ウラ盆　各戸で必ず仏祭りをする。盆踊りをすることもあった。

(5)　秋から冬

八朔　八月一日に作物の神様を祭る。

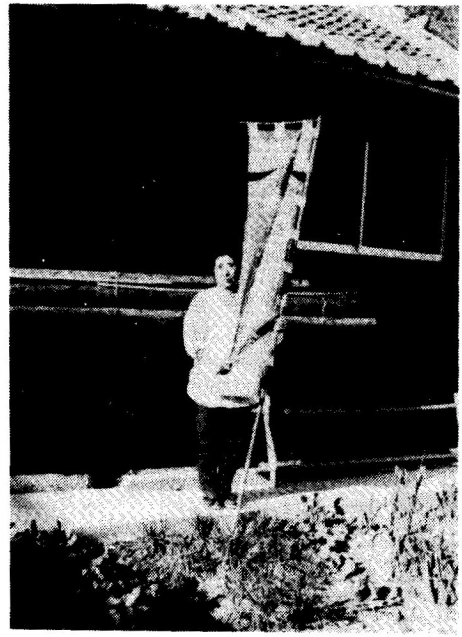
明日　八月一五日に、甘藷を掘って蒸し、鉢や皿に入れて、東方の窓の敷居の上などに置いて月に供える。家族は食事をしながら月の出を待つ。昭和年代になり、腕白な子供等が、月に供えた甘藷を盗りに来る者が出たことがある。九月の明月と混同したものであろう。

二〇日　老婆達が福聚庵に参る例日。

二四日　作網代の老婆達が地蔵さんに参る例日。

九月五日　羽出浦の天満宮の祭り。後に二五日、昭和四七年に二三日に変更した。

天満宮には輪番で日参する。東・地下・作網代の一戸から、誰かが柄杓に潮を汲み日参幟りを持って朝参りし、帰れば隣家に幟りを届ける。翌朝は届けられた家が参って次の家に届ける、という仕組になっている。江戸時代からのしきたりであるという。幟りは幅一尺余・長さ五尺くらいの厚い木綿の立幟りで、紺地に白く「春日参村中安全祈収　願主氏子中」と、白く染め抜いてある。



天満宮祭の幟

継子節供　九月九日は栗飯を炊く。

明月　九月一三日も芋を煮て月に供える。この夜は農作物を盗んでもよいと伝えている。江戸時代に、重兵衛という人が、西野浦の畑に里芋をたくさん植えていた。ところが、九月の明月の夜、いたずらな若いシが子芋だけを盗んで、左の落首を残していたという。

明月や子はそれぞれに取りのけて
　　親を頼むぞ重兵衛さん

二〇日　老婆達が福聚庵に参る例日。

二四日　作網代の老婆達が庵に参る例日。

明治中期より昭和四六年まで、天満宮の秋祭りのヨゾであった。境内を掃除し、天満神社という大幟りを二本立てる。作網代の西端から地下の東端まで、海岸に沿ってロープを張って提灯を一定間隔で釣り下げる。網船や小船は夏祭りの時と同じよ

うに幟りや旗を立てる。

神官の宿には当年新築した家を充てる。神官の一行はヨゾの日に一泊し、祭りの午後に帰る。ヨゾの晩には浦安の舞、祭りの日に浦安の舞と綱切りを舞う。綱切りでは、奉納された何反かの白木綿を切る。切った木綿は網親方や役員に二〜三尺宛配り、残りは神官が持ち帰る。

佐伯から来た商人や浦の商店が、地下の浜に飴・菓子・菓物・玩具・日用品などの露店を出し、特に木立の農家が、渋抜きをした四つ目柿をたくさん売りに来た。

有志や付近の部落の親類を祭り客とし招待するので、主婦は早くから甘酒を仕込み、餅や蒲鉾作り、障子の張り替えや掃除などに多忙である。

祭りの前後頃から、甘藷の収穫と麦の植え付けが始まるので多忙となる。

いの子　江戸時代は、第一の亥の日が武家、第二が庶民の亥の子祝いであったというが、明治以降は第一の亥の日を祝っている。餅を作って神棚に供え、夕食は祝いの膳である。

子供達は葛の蔓を割いて紐を何本も作る。一方が太目の楕円形の石を拾って来て、太目の方を抜け落ちないように葛の紐で包み、四方に葛の長い紐を付ける。夕方頃から、二〜三人宛組んだ男女が、亥の子石と布袋を提げて各戸を回る。中には母親に付き添われた幼児もあり、夜には青年の組が出ることもあった。家の前で亥の子歌を歌いながら、葛の紐を引いたり弛めたりして、亥の子石を上下させて地を搗く。歌が一節終る頃に、家の人が銭か蜜柑・柿・芋などをくれるので、袋に入れて次の家に行く。年長組みはお礼の歌を一節歌って次の家に行く。

亥の子歌

1　祝い目出度な若松様よ、枝もサッサー、栄えて、ホンニー、葉も茂る。

2　此処の屋敷は目出度な屋敷、鶴とサッサー、亀とが、ホンニー、舞い遊ぶ。

3　此処の屋敷に井戸掘り据えて、水はサッサー若水に、ホンニー、金が湧く。

4　此処の姉さん何時来て見ても、茜サッサー、桴で、ホンニー、ねねはかる。

5　姉と妹に紫着せて、どちがサッサー、姉やら、ホンニー、妹やら。

6　沖の暗いのに白帆が見える、あれはサッサー、紀州の、ホンニー蜜柑船。

歌の前に、「亥の子一つ祝いましよう」という詞が入り、歌の後に「良いわいのー、良いわいのー、ヘントンヘントン、亥の子の神さん祝うて下さんせ」という、囃し言葉を続ける。

亥の子石

お礼の歌

貰うて帰りますお旦那様よ、明日はサッサー、お礼に、ホンニー、参ります。

歌の前の詞はなく、歌の後に「良いわいのー、良いわいのー」の囃し言葉を続ける。

お十夜　羽出浦に多い浄土宗門の法要が一〇月一五日にある。仏壇に団子・餅・菓子・果物などを供え、香や灯明を上げて供養する。庵主さんが各戸を訪れて回向する。この日は精進料理である。

鍬上げ　芋収納や麦・えんどうの植え付けを終れば、鍬上げの客をする。家内だけの祝いで、麦飯と大根汁だけであるが、客というので子供達は楽しみにしていた。

冬至　「冬至十夜」とか「お講」といって、真宗門徒は仏祭りをする。敷場・矢石・中越に真宗の家が多い。